

墮落論の論理と世界連邦論——「統墮落論」を起点に——

山崎 義光

一 「統墮落論」の両義的な二つの水準

坂口安吾の「墮落論」には、一見矛盾し捻れたように見える論理が懐胎している。そのことを奥野健男は、安吾には「合理的、現実主義的な傾向」と、精神主義的（非合理主義的）、理想主義的な傾向」という「矛盾した二つの傾向」があると述べた。奥野は、「墮落論」が執筆された一九四六年ごろの安吾が、兄に向けて「きわめて常識的、現実的な意見の書簡を送り、「現実的政治家的観点にたつていることに、ぼくはやや違和を感じざるを得ぬ」とも述べた。「合理主義的、現実主義的な傾向」に対する「違和」である。

奥野のいう「矛盾した二つの傾向」は、「墮落論」が懐胎する両義性として捉えられる。城殿智行は、柄谷行人の安吾論が「他なるもの」との関係にさらされる本来的なあり方に向かうこと

を「墮落」ととらえ、他者との関係に突き放されてある「強さ」

において論じた一方、山城むつみが「浅ましき」や「卑しき」といった「弱さ」が「生きていることにとって不可欠なエレメント」であることを論じたとし、「墮落論」には「強さ」と「弱さ」の両義性が検討されることの必要を述べた。

この両義性は、人間の有限性とかかわる。柄谷は、カントの「簡単に取り除ける仮象」と、「感性的な経験の限界」を超えた「人間である限り容易に抜け出せない超越論的仮象」との差異を踏まえ、安吾の「ラディカルな啓蒙主義」を指摘し「永続的な啓蒙主義者」として論じた。「安吾は、理念において徹底的にラディカルでなければならぬが、実践的には「漸進的」でなければならぬと考へ」たと指摘した。

本稿ではこうした見解をふまえ、「矛盾」や「両義性」を生み出すところにこそ、墮落論の論理のダイナミズム（ラディカルな啓蒙主義）があることに着目する。具体的には「統墮落論」

を起点に複数のテクストをとりあげ、そのなかでの「世界連邦論」「世界単一国家」の布置に着眼して検討することで、それらに通底する墮落論の論理を明らかにする。それによって一九五〇年前後の安吾の「文学」スタイルとの接点に位置づけたい。

尾崎行雄の世界連邦論に言及した「統墮落論」は、一九四六年四月『新潮』に発表された「墮落論」の続篇として同年二月『文学季刊』に発表された。まずはじめに、本稿での理解を示すために、「統墮落論」の論理を二つの水準で構成されているものとしてとらえておきたい。

第一の水準は、「人間の真相」を「孤独」にみて、旧来の制度や道徳といった「カラクリ」に拘泥することを否定し、「カラクリ」から「墮ちよ」という水準である。「裸」になれとの隠喩で述べられる。カラクリから墮ちいく先にあると想定されているのは「孤独」という偉大なる人間の真相である。そうした「人間の真相」の形象は、「文学のふるさと」や「白痴」「桜の森の満開の下」で表象した、支えるもののない、究極的には虚空中に消える「孤独」という「ふるさと」、余燼をたてた焼跡のイメージと結びつく。それでもなお生きてある「人間」性を肯定して、「カラクリを、くづ」し批判する、「墮ちよ」という「文学」の水準といつてよい。

注意しておきたいのは安吾の「人間」観である。「人間の真相」を「孤独」とみるとともに、「人間の一生ははかないもの」であり、また「人間といふものはペラボーなオプチミストでトレンチカンなわけの分らぬオツコチョイの存在」であるととらえた。「人間」を有限で感性的な存在とみる。それに対して「無限なる人間の永遠の未来」を対置した。「我々の一生などは露の命であるにすぎず、その我々が絶対不変の制度だの永遠の幸福を云々し未来に対して約束するなどオツコザイ千萬なナンセンスにすぎない」(427) という。有限で感性的な「人間」は、「絶対不変の制度」や「永遠の幸福」を「約束」することはできないと限定的にとらえた。

第二の水準は、墮ちきるには弱い、有限で感性的な「人間」観から、なんらかの「カラクリ」を編み出さずにいられないとみる、「生きよ」という水準である。「合理主義的、現実主義的な傾向」(奥野)を述べたのはこの水準である。今現在の限定された「生活」のなかにあつて可能で合理的な生き方を構想し、漸進的な改良をおこない「カラクリをつくる」「政治」が論じられることにもなる。敷衍すれば、ズレをはらんだ他者としての「人間」たちのなかに内属することが生きることであるならば、そこには不可避にカラクリが求められることにもなるとい

うことである。それは、安吾の時事・世相への関心と対話的な姿勢にあらわれる。

池島信平は、雑誌『座談』創刊号における阿部定との対談企画（『阿部定・坂口安吾対談』一九四七・一二）を経て、『文芸春秋』で『安吾巷談』の連載（一九五〇・一〜二）を企画した。池島は阿部定と対談する安吾を「坂口さんはなかなかジャーナリストで、うまく話を引き出して成功した」とし、次のように評した。

ものを書く人で、これほど雑誌編集、ジャーナリズムについて、理解のあつた人は少いと思う。坂口さん自身、稀代のジャーナリストであつたとわたくしは思う。文章は明快であるし、その発言はいつも時代の弊を真ツ直ぐに突いて、しかも一脈斬新な趣きがあつた。

安吾本人に対して「あなたの本領は随筆家であり、時評家ですよ」といつて、機嫌をわるくしたことがある」とも回想した。池島は「ジャーナリスト」、「時代の弊を」突く「時評家」としての安吾の一面をとらえた。「半年のうちに世相は変わった」とはじまる「墮落論」も、「敗戦後国民の道義頹廢せり」というのだ

が」とはじまる「統墮落論」も、敗戦後の世相を理解する枠組みに対する「時評」的性格をもつ。

松浦総三は、戦後のルポルタージュ隆盛を『文芸春秋』誌上で開始したのが「ルポ風エッセイ」の『安吾巷談』だったと次のように述べた。「安吾巷談」は反共もやるし、天皇制批判もやるし、淫売宿もやるし、競馬もやるし、一九五〇年ごろの日本の風俗をルポしたもので、当時かなり評判になった。この『安吾巷談』は、その後の『文芸春秋』のルポの手本になるものである。

池島や松浦は、戦後社会に生じた諸々の出来事や事件への関心、およびそれらに対する世間の反応や論評といった「世相」に関わる「時評家」としての安吾の一面をとらえ、戦後におけるルポルタージュ、ノンフィクションというジャンル隆盛の始まりと関係することを指摘した。墮落論から『安吾巷談』に通じる一面だが、ここに安吾の世相と対峙するスタイルをみることができるだろう。もとより「時評家」「ジャーナリスト」という理解には、「文学」者安吾は収まらない。ただ、安吾は常に時事的な世相のなかに内属して享樂し、その有限性のなかで対談・対話することをスタイルにしたことを指している。

もちろん、「孤独」という「人間の真相」へ「墮ちよ」という

水準で墮落論は戦後の混乱期に批評的なインパクトを持ち得た。

この水準の論理がなければただの「常識の裏返し」に過ぎず、実際そうした見方もあつた。だが、福岡弘彬が論じたように、安吾の「墮落」の論理には戦前期からの尖锐な批評意識があつた。そこに、ジャーナリスト・時評家とは一線を画する安吾の真価があつた。

他方で、墮落論の論理には「生きよ」という水準もある。これら二つの水準は一見矛盾しているようだが、そうではなく、相関関係がある。人間の編み出した道義や制度という「カラクリ」に囚われてあることから墮ちることが求められる。しかし、人間は有限の「露の命」であり「人は無限に墮ちられるほど堅牢な精神にめぐまれていない」ので、なんらかのかたちで旧来のとは異なる「カラクリ」を編み出す。ただ、そうして編み出された制度や秩序は仮設的なカラクリに過ぎず、いつかまた反逆され復讐されざるをえない。ここには、常に過程的であることにとどまる論理が懐胎している。

以上のように墮落論の論理を二つの水準でとらえ、以下では「統墮落論」のなかで言及した尾崎行雄の世界連邦論への両義的な言及に着目することを起点に、複数のテキストとの関連を通じて考究したい。

二 「号堂小論」「統墮落論」と世界連邦論

「統墮落論」は、「敗戦後国民の道義頹廢せり」と論評されることに對し、「戦前の「健全」なる道義に復すること」が望ましいのではないと述べた。「戦前」までの「道義」を世相理解の枠組みとすることに對する批判である。道義の頹廢した「都会文化」に對して、「農村文化」を称揚し「健全なる道義」とする理解枠組みを批判した。すなわち、「農村の美德は耐乏、忍苦の精神だ」とされるが、だからこそ「便利の機械は渴望されず」「兵器は發達せず、根柢的に作戦の基礎が欠けてしまつて、今日の無慘極まる大敗北となつた」という。また「天皇制」の「カラクリ」に言及し、「天皇が必要」だったのは、「藤原氏や将軍家」が「自分自身が天下に号令するよりも、天皇に号令させ、自分が先ずまつきにその号令に服従してみせることによつて号令が更によく行きわたることを心得てゐた」からだという。そこに天皇制の「歴史的カラクリ」の核心をみた。農村文化の美德や天皇制という「カラクリ」から、「墮落することによつて、真実の人間へ復歸しなければならぬ」と論じた。

さらに挙げたのが、尾崎行雄の「世界連邦論」だった。それ

は、二〇世紀前半における二度の世界大戦を経て、戦争のない世界秩序を構想した社会像の提唱だった。まず、尾崎行雄（罇堂）の経歴とその世界連邦論について概略をおさえておきたい。

尾崎行雄（一八五八〜一九五四^②）は、明治から昭和にかけての護憲派政治家として知られる。第一回総選挙から衆議院議員に二十五回連続当選。日露戦争前後の東京市長を経て、一九一四年、大隈内閣で司法大臣を勤める最中に第一次世界大戦が勃発。戦後、一九一九年に欧州を視察し、戦争の悲惨を見聞して軍縮論者となる。大正期には、護憲運動のほか、婦人参政権運動、治安警察法改正運動、軍縮推進運動、治安維持法反対運動を支持した。昭和に入り、満洲事変（一九三一）の前にアメリカ、ヨーロッパにわたる。その間に五・一五事件（一九三二）で盟友の犬養毅暗殺が起きると、帰国に先立ち遺言として「墓碑の代りに」（『改造』一九三三・一、四）を発表。このなかで、世界浪人論、世界連邦論を述べた。その後、日独伊三国同盟、大政翼賛会を批判。太平洋戦争中にも、翼賛選挙での発言により不敬罪で起訴されるが無罪となる。そして終戦後、一九四五年十二月十一日に「世界連邦建設に関する決議案」（以下「決議案」と略記）を連名で国会に提出。その後、世界連邦運動同盟の総裁となった。

安吾は、一九四五年二月二日の新聞記事から、尾崎の世界連邦論に言及したが、尾崎にとつては第一次世界大戦後からの持論だった。「決議案」では世界連邦を、「独立国」で構成され「国際紛議の予防と裁決ダケ」を担当する「中央政府」をおくとした。しかし、尾崎はより一層徹底した「世界の趨勢」を、「墓碑の代りに」で述べていた。すなわち「国家時代から国際連盟時代へ」そして「世界連邦」へという進化に世界の趨勢があるとし、「非国民」を肯定して、世界の浪人、「国際主義者」たるべきことを論じていた。ここには、脱国民国家という発想があった。

こうした尾崎の脱国民国家までを想定した世界連邦論は、エメリー・リーブスの発想に近い。リーブスは一九四五年六月に『平和の解剖』を出版。とくに原爆投下以後、アメリカをはじめ二五カ国二〇言語に翻訳されベストセラーとなった。このなかで次のように論じていた。国民国家を主体とする国際社会では戦争は避けられず、国民を総動員する現代の戦争は、勝者にも敗者にも平和と幸福をもたらさない。世界戦争の根本的な問題は、ネーション・ステート (nation-state) 国民国家、主権民族国家) を単位とし各国間の条約に基づくインターナショナルイズム (inter-nationalism 国際主義) にある。それに対して、平和運動、解放運動、第三インターナショナル設立等の動きが紹介されたのだ^③。一方、一九二〇年に第一次世界大戦の連合国とドイツの間で締結された講和条約 (ヴェルサイユ条約) と同時に、国家を単位として組織された国際連盟も設立された。世界連邦、共産主義的理想社会から、国際連盟のように外交と国家間協調によるものまで含めて、地球規模の世界永久平和の現実化の方策がリアルなものとして構想されるようになった。が、第二次世界大戦は避けられなかった。一方日本では、石原莞爾の世界最終戦争論^④や、下中彌三郎のような反資本主義の立場から日本をアジアの盟主として英米に対抗するアジア主義が、皇国日本による世界統一という平和実現の理念のもとに現れていた。

第二次大戦後の世界政府建設同盟には、戦前までの皇国主義、アジア主義者から、宗教家、国際主義者、リベラリストにいたるまで多様な立場の人々が集まった。谷川徹三^⑤も世界連邦運動の論客として名を列ねた。尾崎の世界連邦論は、第一次大戦後、世界の統一的新秩序の必要性と可能性をめぐる多様な発想が現れたころに発想され、第二次大戦後の趨勢のなかで主張されていたといえる。

「統墮落論」が発表された一九四六年時点では、四五年一〇月

実現のためには、国家を超越した普遍的な法と秩序をそなえた世界機構 (universal institutions capable of creating law and order in human relations beyond and above the nation-states) のなかで、安全・義務・権利を位置づけることが必要だと主張した。尾崎は「世界連邦の建設」(恒久平和研究所編『一つの世界』一九四七・三) で、「アメリカのリーブスといふ学者」は、国家間の「条約」で成り立つ国際関係ではなく「世界を単一国家にしなければならぬ」と言っているが、「これは私の提唱してゐる世界連邦と同じものと思ふ」と述べた。

第一次世界大戦前後には、地球全体を「世界」ととらえる発想が現実的な課題として認識されていた。H・G・ウェルズは、原子力兵器の発明をいちはやく察知し、人類以前から人間社会への「世界史」、そして未来社会の可能性までを、評論やSF小説で論じた。ロシア革命によるソヴィエト社会主義共和国連邦の誕生をきっかけとする共産主義による世界同時革命の構想と第三インターナショナルの設立(一九一九)も、その理念において資本主義、帝国主義に代わる理想的世界秩序実現のための動きだった。こうした動きは日本においても、フランスにおけるアンリ・パリピュスのクラルテ運動に端を発し反戦平和運動の機関誌として『種蒔く人』が発刊され、ヨーロッパにおける

に国際連合が設立され、尾崎の「決議案」が同年十二月に提出されていた。そして、日本における世界連邦建設同盟の設立が四八年八月である。安吾は、「罌堂小論」(一九四五・一二)、「続墮落論」(一九四六・一二)、「戦争論」(一九四八・一〇)、「インテリの感傷」(一九四九・三)で世界連邦論に言及した。「罌堂小論」では「世界浪人論」、「続墮落論」では「世界連邦論」、「戦争論」は「インテリの感傷」では「世界単一国家」と呼称が変化する。世界連邦運動の組織化後にむしろ「世界単一国家」と記すのだが、こうした呼称のブレは世界連邦論が発想から具体化された構想と運動へ展開していく過渡的な時期に重なっていたことにもよるだろう。

「罌堂小論」は初出誌未詳とされ、一九四七年六月刊行の『墮落論』に収められた。が、執筆時期は引用文献の書誌などをみても四五年一二月末ころ、「続墮落論」に先立つと考えられる。「続墮落論」の尾崎批判の基本的な論点は「罌堂小論」ですでに示されている。前半で尾崎と志賀直哉の「文学」性が論じられ、最後に「党派性を難ず」が付せられている。前半部の要点は、政治家尾崎による世界浪人論、世界連邦論という社会構想と、文学者志賀の戦後社会に対する所感とを対比し、志賀よりも尾崎の方がまだしも「文学」的であると評す。しかしやはり尾崎

には「人間」ととつての「家庭性」や「個性」に対する省察が欠け、「文学自体の深さにくらべれば低俗な思索家」に過ぎないと限界もみる。後半部「党派性を難ず」では、「藩閥とか政黨閥」など、「閥とか党派根性」に頼る「日本人の弱点」を批判。「民衆」「人間」の「生活」が目的で、「政黨」は政治的手段にすぎないのだから「日本に必要なのは制度や政治の確立よりも先づ自我の確立だ」と述べた。この部分だけを見れば、戦後民主主義における主権者としての「自我の確立」を述べたかのようにも受け取れる。しかし、宮澤隆義が「白痴」を論じるなかで触れたように、安吾が墮落論でいう「自我」や「人間」とは、民主主義という制度(カラクリ)に順応する主体なのではない。「制度は必ず人間によつて復讐せられ、欠点を暴露する」(41)とみるからである。

「続墮落論」でも次のように尾崎の「世界連邦論」に言及した。「明治までの日本」では「藩と藩で対立」しており、それを打破することで「日本人」が誕生したが、こんどは「国」どうしが対立した。「明治に於ける非藩人の如く、非国民となり、国家意識を破るることによって国際人となることが必要で、非国民とは大いに名誉な言葉である」とするところに「彼の世界連邦論の根柢」があるとみた。だが、尾崎の世界連邦論には「国と「世界単一国家」に言及したと理解できる。冒頭「戦争は人類に多くの利益をもたらしてくれた」と始める。しかし、原子爆弾の実現は人類進歩の「空想を超えてしま」い、「もはや人間のものではなく、まさしく悪魔の兇器で」、「今日まで戦争がもたらした効能も、この悪魔のバクダン以後は、ついに被害を上廻ることは出来ないであろう」と、「一九四五年八月六日のバクダン」以後の現在をとらえる。そうした現在認識を前提に、「戦争」と「最後の」理想としての「世界単一国家」の関係を次のように述べた。

ここに、「政治、そして社会制度」、世界連邦論の限界を批判的にとらえる第一の水準の論理の核心がある。

とともに他方で、「人間の墮落の限界」も述べた。有限的で感性的な「人間の真実の生活」「個の対立の生活」のなかで、「カラクリをつくる」という第二の水準の論理である。ここに「政治」論としての「戦争論」の論点が位置づけられる。

三 「戦争論」「インテリの感傷」における

「最後の理想」と「現実」

戦争が我々にもたらしたものは何か。文明の発達、文化の交流、そして、それが今後に於ては、世界単一国家となり、それが戦争の最後の収穫となるべき筈であったであろう。

然し、もはや、ここに至つて我々は、戦争の力に頼つてその収穫を待つことは許されない。他の平和的方法によつて、そして長い時間を期して、徐々に、然し、正確に、その実現に進む以外に方策はない筈なのだ。なぜなら、兵器の魔力、ついに空想を超すに至つたからである。(7-77)

「戦争論」(『人間喜劇』一九四八・一〇)は、第二の水準で

「悪魔のバクダン以後」、「世界単一国家」を「戦争」により実現する道筋の否定が述べられている。これは、たとえば最終戦争論（石原莞爾）や革命戦争など、戦争を手段として「最後の収穫」を得る方法の否定である。したがって、「理想」は「戦争」以外の「他の平和的方法」によつて「徐々に、然し、正確に」実現するほかないという。ここに、「方便を是」（778）とする「政治」が意義づけられる。

人間というものは、五十年しか生きられないものだ。二度と生れるわけにはいかない。人間の歴史は尚無限に続き、常に人間は絶えなくとも、五十年しか生きられない人間と、歴史的に存在する人間一般とは違う。

政治というものは、歴史的な人類に関係があるわけではなく、常に現実の、五十年しか生きられない人間の生活安定にのみ関係しているものである。

政治というものは、常に現実をより良くしよう、然し、急速に、無理をして良くするのではなく、誰にも被害の少ない方法を選んで、少しずつ、少しずつ、良くしようとする。ここで、こう変えれば、かなり理想的な社会になる、ということが分つていても、いきなりそれを実現すると、多数

の人々に甚大な迷惑がかかる、急いでは、ムリだ、と判断された時には、理想を抑えて、そこに近づく小さな変化、改良で満足すべきものである。

我々の後なる時代に、各々の時代の人が、各々の時代を少しずつ住み良くして行く。人類永遠の平和などというものを、我々が自分の手で完成しようなどとは、後なる時代の人々、未来に対するボートクというもので、各時代に、各時代の人々が、その適当の向上改良を選定して行くところに、政治の正しい意味があると考ええる。（778）

ここではまず、「五十年しか生きられない人間」と「歴史的に存在する人間一般」が区別されている。「政治」は前者に、「理想」は後者にかかわる。「理想的な社会」を「いきなり」「実現する」のではなく、「理想を抑えて、そこに近づく小さな変化、改良で満足すべき」とするのが「政治」である。安吾は、「世界単一国家」を理想とし、それに対して「共産主義」は否定的に論じた。その違いは、理想社会像としては両者を「是」としながら、後者がこのような意味での「政治」を欠くとみたところにある。すなわち「共産主義社会も、今ある日本の社会形態よりも、ましな形態であるのは分りきつている。然し、それを、

いきなり実現しようとするのはムリだ」（779）という。共産主義は「理想を知つて、現実を知らず、その自らの反現実性に批判精神の欠如せるもの」（781）だからである。

ひるがえつて、「罅堂小論」では尾崎の世界連邦論を「人間の家庭性とか個性といふものに就て否定にせよ肯定にせよ誠実なる考察と結論を欠く」「暴拳」だと批判した（789）のと比べる。と、このエッセイでは「世界単一国家」を理想としている点で、批判的観点がゆるみ後退した論理にもみえる。しかしこれを「統墮落論」の第二の水準において論じたとみれば、矛盾なのではない。「世界単一国家」や「家に代る社会秩序」（789）などに、いわば新しいカラクリの「建設」（786）として言及したといえる。「政治」について安吾は口述筆記「スポーツ・文学・政治」（『近代文学』一九四九・一）でも「現実のことは現実的に処理するより外に道はないんで、その事に関してなら、ボクは政治第一主義を取る」（8317）と発言した。ただし、「政治」は現実的な「方便」であることを免れず、そのカラクリは常に批判と改良の余地のある仮設的なものである。

この論点は「インテリの感傷」（『文藝春秋』一九四九・三）でも述べた。このエッセイは、一九四九年一月二三日に実施された第二四回衆議院議員総選挙の結果、日本共産党が三五議席

と躍進し「最近著名な文化人の共産党入りが続出している」という時事に言及することから始めている。「共産主義政府が樹立され、搾取階級がなくなつても、戦争に焼きはらわれた資源乏しいこの狭小な国土から、安定した豊かな生活がでてくる筈はない」と批判した。注目したいのは、「理想」と「現実」の差異についての論点である。

理想と現実を混乱させてはいけない。理想というものは、最後のものだ。それは、わかりきつている。共産主義などというものが、決して我々の最後の理想となりうる筈のものではない。理想は、簡単明快、きまりきつていてはならない。世界単一国家、そして、各個人の不幸が最小限になるまで、その秩序が改良工夫された社会である。これはある点まで公式的に算出することが出来ても、万億の現実に突き当って改良工夫する以外に、最後の成果は望み得ない性質のものであろう。（7128）

ここでも「世界単一国家」を「最後の理想」と述べる。だが、「理想と現実」の区別と関係に注意が必要である。「理想」は「最後のもの」と位置づけられ、「理想は、簡単明快、きまりきつ

「各個人の不幸が最小限になる」ことが理想である。その一方、「万億の現実」に突き当たって改良工夫することが強調される。ここでいう「万億の現実」は、「罌堂小論」でいう「家庭」や「個」に対する省察、「統墮落論」でいう「人間の対立」を含むであろう。「世界単一国家」は、大戦後の世界認識をふまえて、「戦争」以外の「他の平和的方法」による理想社会像として名指された。だが、その具体的実現形態は定かではなく、「各個人の不幸が最小限になる」という抽象的指針にとどまる。実際の「秩序」は「万億の現実」に突き当たって改良工夫することによって現実化するほかにないという。

ここで注目したいのは「デーヴィス青年の新人運動」(Garry Davis, 1921-2013)は、俳優の両親のもとに生まれ、アメリカ合衆国ペンシルバニア州フィラデルフィア市郊外オーバールックにある高校を卒業後、カーネギー工科大学で演劇をまなんだ。一九四〇年、プロードウェイにデビュー。その後、第二次世界大戦でドイツ空襲に飛行兵として従軍。この体験を経て、戦後、コード・マイヤー『平和か無政府状態か』⁽²³⁾を読み世界連邦の提唱に共鳴した。だが、「世界の緊張は急速に高まっているのに、

世界連邦主義者たちの歩みは遅々としていた」と感じ、単独で「世界市民」の行動をおこす。戦争は国家の存在によって起こる。しかし、そもそも地球に国境線はないはずである。デーヴィスは、国家に帰属しない無国籍の立場で世界を移動し国境線を越える冒険を試みた。一九四八年五月、パリのアメリカ大使館でアメリカ国籍の放棄を申請。無国籍となってフランスに滞在するが、滞在にも出国にも法手続き上問題を起こす。日本語版訳者の宇土尚男は「彼の言行は、舞台の演技の延長のように思われ」「ひとつの理念を演技によって開き示してゆく人」だと評した。デーヴィスは単独で行動を起こすにあたって、つねにタイプライターを携帯し、マス・メディア(新聞、ラジオ、テレビ)に声明文を発表した。メディア報道を通じて行動の意味を宣明し、世論の支持を受けたことで、単独の行動ながら運動になりえた。彼の行動に共鳴した協力者も、カミュなどの著名人から一般人にいたるまで行く先々に現れた。行動が「演技」であるなら、国境や米国以外の国を舞台装置とし、協力者たちと共同で台本をつくり、メディアを拡声器に世界へ向けて台詞(声明)を発したのだといえようか。メディアでの声明が重要なことは、この行動をやめるきっかけとなったエピソードからわかる。一九五七年、意図的にパリでフランスの法に触れる罪を犯

四 「臨床」としての墮落論の論理

である」とも述べた(「1933」)。安吾は「デーヴィス青年」に対し、国家によって分割された「世界」が「単一」になることを「最後の理想」とする点で共鳴し「文化人」批判をしつつ、しかし「現実が伴わな」い点では批判的な理解を示したのである。

「統墮落論」は次のように終わっていた。

一九四九年のはじめに発表した「インテリの感傷」で安吾は、四八年にはじまったころのデーヴィスの行動に言及した。「世界が単一国家になるまでは、ゴタゴタの絶え間がないにきまつている」というのに続けて「デーヴィス青年の新世界国人運動」に言及し「国籍だけ新世界国人になったところで、現実が伴わなければ、どうなるものでもない」と批判的に述べた。安吾において「世界単一国家」は「最後の理想」ではあつても「現実が伴わなければ、どうなるものでもない」のである。しかし、それは「清貧、というセンチメンタリズム」によって共産党に接近する「文化人」と比べたときには「老練なる文化人たる人々に、新世界人デーヴィス青年ほどの着想がないのが不思議なの

生々流転、無限なる制度だの永遠の未来に対して、我々の一生などは露の命であるにすぎず、その我々が絶対不変の制度だの永遠の幸福を云々し未来に対して約束するなどチヨコザイ千万元ナンセンスにすぎない。無限又永遠の時間に対して、その人間の進化に対して、恐るべき冒瀆ではないか。我々の為しうることは、ただ、少しづつ、良くなれ、といふことで、人間の墮落の限界も、実は案外、その程度でしか有り得ない。人は無限に墮ちぎれるほど堅牢な精神にめぐまれてゐない。何物かカラクリにたよって落下をくいとめずにみられなくなるであらう。そのカラクリを、つくり、そのカラクリをくづし、そして人間はすゝむ。墮落

は制度の母胎であり、そのせつない人間の真相を我々は先づ最もきびしく見つめることが必要なだけだ。(4277、278)

「生々流転、無限なる人間の永遠の未来」に対して「我々の一生などは露の命」である。有限の人間が生きる「世界」(世相)は、つねにある種の理解枠組み(カラクリ)によつて認識される。安吾は時事的话题を出発点とし、世相がどのような理解枠組みで認識されているかを問題とした。「時評家」(池島)とも呼ばれた由縁である。天皇制、武士道、都会を批判する農民文化にいたるまで、それらが前提とする普遍性をよそおつた旧来の制度・認識の枠組みを取り上げて批判的に論及し、「墮ちよ」といった。他方で、そうした既成のカラクリでとらえられた「世界」(世相)理解の歪みに囚われることなく、「人間の真相」を直視しながら、現に今ある社会と人間の有限性のなかで、「生きよ」といった。

「豊堂小論」から「インテリの感傷」までに通底する墮落論の論理のなかで、世界連邦論は両義的な位置づけを与えられている。「罌堂小論」「続墮落論」では尾崎の世界連邦論に一定の評価をしつつも「人間の対立」への省察に欠けると批判した。「政

治、そして社会制度は目のあらひ網」であり、「人間は常に網からこぼれ」おちる。そこに批判の余地が残るとした。「絶対不変の制度だの永遠の幸福を云々し未来に対して約束する」ことはできないのである。一方、「戦争論」「インテリの感傷」では「世界単一国家」を理念的な「最後の理想」とした。それは原爆が投下された世界戦争後の世界に対する認識により枠づけられ、戦争を回避する理想社会像として見出されていた。ただし、具体的な秩序形態としてではなく、理念として名指されたにとどまる。強調されたのは、「人間の対立」をふまえて具体化された新しい秩序の「建設」のために「万億の現実突き当つて改良工夫する」ことだった。

最後に世界連邦論から離れて、墮落論の論理を一九五〇年前後における安吾の文学スタイルへの展開に接続してみたい。

墮落論の論理は、小説「肝臓先生」(『文学界』一九五〇・一)の赤城風雨先生に「臨床家」として形象されているとみることができ。風雨先生は、多くの患者が流行性肝臓炎であることが発見する。そして「この肝臓炎の真相を究めて天下に公表することが神の意志であるかと思索にくれ」る(833)。すなわち「肝臓炎の真相を究め」ることが、「神の意志であるか」のごとき、理想として見出される。「しかし、先生はついに自分の行い悲劇」(838)であると「私」はみる。その愚直さゆえに、どこか笑ってしまう人物でありながら「悲劇」を招くことを指す。風雨先生は、自らのおかれた情況の限定のもとで肝臓炎の病因説明を理想としつつも「足の医師」にとどまり、「肝臓炎の真相」は説明できないなか、周囲とのズレをはらんだ批難と尊敬にまみれて治療にあたる「臨床家」として形象されている。

ひるがえつて、世相を理解する旧来の枠組みを批判し、現に生きている人間の真相を直視する墮落論の論理は、世相に対する「臨床」的な性格をもつ。そうしたスタイルは『安吾巷談』に通じる。ある種のステイックな理解枠組みに依存することなく、世相と向きあう対話的な「巷談」である。安吾の五〇年前後の営為を遠視すれば、「人間の真相」の肯定を土台として、戦後復興期の大衆社会化が進行する世相に内属しながら、あらゆる常識的見解や立場またジャンルの枠組みに居直ることなく距離をもち、墮落論の論理によつて世相に対峙する「文学」スタイルを模索した軌跡とみることができのではないだろうか。

注

※坂口安吾の本文引用は筑摩書房版『坂口安吾全集』(全十七巻、別巻)を用い、引用に付した(〇〇〇)は巻数と頁数を表す。

くべき道ととり戻し、「学理的に説明することは自分の任務ではなく」「一介の足の医者として全うすべく志をさだめた上は、あくまで臨床家としての本分のみを果すべきだ」と観ずる。すなわち、目の前の肝臓炎患者の現実を改良(治療)する「足の医師」であることが「自分の任務」だと見定める。症状としての肝臓炎は疑いないが、しかし真の病因は未だ医学的に解明されていない。その段階での処方「葡萄糖」の「注射」だった。しかしそれは押野武志⁽⁸⁾が指摘したように「栄養の補給になるかもしれないが、肝臓炎そのものに対しては無効である」。この治療を「社会健康保険制度」の濫用とみる「保健課の係員」が現れる。また、傷痍軍人たちから発生した病気を「チブス」とみる「軍医」は、肝臓炎だから隔離は必要ないと反対する風雨先生を「軍の命令」に反し「威信を傷つけ」たと否定しようとする。他方で、患者たちの尊敬をうけた。ただし、それは医学的見識に対してではなく、人格的に慕われたことによる。登場人物それぞれに理解枠組みが異なり、どこかにトンチンカンな謬見を抱えている。それらの人々のあいだで、治療に邁進する愚直ゆえにユーモアをまとうた風雨先生が形象される。風雨先生は空襲警報のサイレンの鳴るなか往診に出た舟が空襲にあい最期を迎える。それは「悲痛でもあるし、滑稽でもある」「笑えな

- (1) 奥野健男『坂口安吾』(文芸春秋、一九七二・九/文春文庫、一九九六・一〇)「虚無の合理主義—安吾の宇宙」および「第三章 戦後乱世の時代/敗戦と安吾—『墮落論』」
- (2) 城殿智行『坂口安吾/評論—エッセイ事典 墮落論』(『坂口安吾事典(作品篇)』至文堂、二〇〇一・九)
- (3) 柄谷行人『坂口安吾と中上健次』(太田出版、一九九六・一)
- (4) 山城むつみ「卓しきというエレメント」(『転形期と思考』講談社、一九九九・八)
- (5) 柄谷行人「安吾とアナーキズム」(『坂口安吾論集1 越境する安吾』ゆまに書房、二〇〇二・九)
- (6) 以下では「墮落論」と「統墮落論」を区別して表記する。また、両テクストに通底する論理として述べる場合には「をはずして表記する。」
- (7) 池島信平『雑誌記者』(中央公論社、一九五八・一〇/中公文庫、一九七七・六)「雑誌記者の生き甲斐」
- (8) 松浦総三「松浦総三の仕事③ ジャーナリストとマスコミ」(大月書店、一九八四・一)「第五章 日本ルポルタージュ史論」
- (9) 時野谷ゆり「安吾巷談」の形成と方法」(『国文学研究』二〇〇六・三)は、「巷談」の形成に雑誌編集者との連携、読者の反響との運動が働いたことを論じた。また「巷談師」と名のるところに「果敢
- な取材態度と本質を透徹する批評眼」への安吾の自負と自覚があると指摘している。
- (10) 大宅壮一『仮面と素顔』(東西文明社、一九五二・九)。大宅は「安吾巷談」ころまでの戦後の安吾について「かれの書くものは、つとめて常識に挑戦し、反逆し、そこから逸脱しようとしているが、結局は常識の裏返しにすぎない場合が多い。それはかれの強みであると共に、それが読者にわかってしまえば、かれのもっている魅力の大半を失う恐れがある」とした。
- (11) 福岡弘彬「墮落」と「運命」—坂口安吾『墮落論』と保田與重郎的「デカダンス」の関係をめぐる」(『日本近代文学』二〇一八・五)は、「デカダンス」「墮落」の理解をめぐる、戦前期日本浪漫派の保田與重郎との近接と批評的な対決によって鍛えられた知的批判として安吾の「墮落」を論じた。
- (12) 尾崎の経歴については、伊佐秀雄『尾崎行雄』(吉川弘文館、一九六〇・六)を参照。なお、安吾の父は尾崎と交流があり、安吾は「石の思ひ」(『光 LA CLARTE』一九四六・一)のなかで尾崎を「政治家よりも文学者により近い人」、物事の「見方が万事人間的、人性的」だと評し、「自分ながらウンザリするほど器堂的な臭気を持ちすぎている」と記した。
- (13) 日本における世界連邦運動については『世界連邦運動二十年史』

- (世界連邦建設同盟、一九六九・五)、田中正明『世界連邦 その思想と運動』(平凡社、一九七四・一一)を参照。
- (14) 『毎日新聞』一九四五年二月二〇日、二二日に上下二回にわけて掲載された尾崎行雄「時局を語る」のうち、「下」に「世界連邦論」がある。
- (15) 稲垣守克「エメリー・リーブス略歴」(エメリー・リーブス「平和の解剖」稲垣守克訳、毎日新聞社、一九四九・二)。原書は、Bnary Reeves, *The Anatomy of Peace*, Harper & Brothers Publishers, 1945。
- (16) 北条常久「種時く人」研究—秋田の同人を中心として—(桜楓社、一九九四・一)
- (17) 石原莞爾「最終戦争論」一九四〇年五月、京都義方会の講演録(石原莞爾『最終戦争論・戦争史大観』中公文庫、一九九三・七)。ヨーロッパの戦争史、戦術・兵器の発達史を踏まえ「戦争発達の極限に達するこの次の決戦戦争で戦争が無くなる」と論じた。中公文庫「解説」で五百旗頭真は、「使命観過多なナショナリストとして激しい情念と目的意識をみなぎらせ」つつ、ヨーロッパの軍事史を踏まえ「枝葉を切り捨て主要な特徴と法則性をかなり大胆に引き出し仮説を樹立」した「世俗的終末論」と評した。
- (18) 下中彌三郎の思想遍歴と世界連邦運動との関係については、中島岳志「下中彌三郎 アジア主義から世界連邦運動へ」(平凡社、二〇一五・三)を参照。
- (19) 谷川徹三は、一九四九年三月に世界恒久平和研究所主催の「世界憲法研究会」へ参加以後、世界平和論、世界連邦運動の論客となる。著書に『戦争と平和』(雲井書店、一九四九・一〇)、のちにこれを増補した『平和の哲学 世界連邦政府運動のために』(社会思想研究会出版部、現代教養文庫、一九五三・一)がある。その後改題され「世界連邦の構想」(講談社学術文庫、一九七七・一)。増補の際加えられた「アジアとヨーロッパ 世界連邦アジア会議に出席して」(『世界』一九五三・一)は、安吾「もう軍備はいらない」(『文学界』一九五二・一〇)とともに亀井勝一郎編『平和の探求』(河出書房、一九五三・五)へ再録された。
- (20) 尾崎行雄「時局を語る 下」(前掲注14)。その他、武者小路実篤と志賀直哉との往復書簡「手紙」(『文芸』一九四五・九)一〇合併号)。志賀直哉「声 特攻隊再教育」(『朝日新聞』一九四五・一二・一六、朝刊)。
- (21) 宮澤隆義『坂口安吾の未来』(新曜社、二〇一五・二)「第六章 空襲と民主主義」
- (22) ゲーリー・デービス『国境を破ろう 世界市民冒険記』(宇土尚男訳、弘文堂、一九六三・一〇)。原書は、Garry Davis, *My country*

is the world, G. P. Putnam's Sons, 1961.

(23) コード・マイヤー『平和か無政府状態か』(木下秀夫訳、岩波書店、一九五二・二)。原書は Cord Meyer, Peace or Anarchy, Little, Brown and Company, 1947。「謝辞」に「私はエメリー・リーヴス氏およびその著『平和の解剖』(アナトミー・オヴ・ピース)によって、啓発されるどころが多かった」とある。

(24) デービス前掲書、宇土尚男「訳者まえがき」

(25) デービス前掲書、「16 取り返しのつかぬ失敗」

(26) 押野武志「雨ニモマケズ」のパロディー坂口安吾「肝臓先生」の戦略」『文学の権能』翰林書房、二〇〇九・一一)

(謝辞) 本稿は二〇一六年九月一八日開催の坂口安吾研究会第二九回研究集会での発表「続墮落論」の論理と回路」に基づき、当日の質疑や意見交換も参考に、その後大幅改稿したものです。記して感謝の意を表します。